2004年7月　兵庫県香美町でコケに見入る道盛さん（写真提供:道盛さん）

NPO法人
大阪自然史センター理事

道盛正樹（みちもり まさき）さん

プロフィール

1950年、兵庫県西宮市生まれ。追手門学院大学卒業後、川西市役所に就職。74年から92年まで農林業などを担当。03年3月退職し、現在は会社勤務。「大阪市立自然史博物館友の会」入会は、大学生時代の71年。コケ植物を得意分野に、ナチュラリストとして現在も調査・研究を続けている。77年から友の会評議員、01年からNPO法人大阪自然史センター理事。他に日本蘚苔類（せんたいるい）学会会計幹事など。

自然に親しめば、モノや命を大切にするようになりますね

大阪市立自然史博物館を活動拠点とする「大阪市立自然史博物館友の会」（以下友の会）が今年、発足50周年を迎えた。前身は、博物館誕生5年後に発足した「後援会」を、1958年の移転開館時に改称した「大阪自然科学研究会」。現在は約1800世帯が会員登録している。

博物館を積極的に利用し、自然に親しみながら学ぼうというのが設立趣旨。恒例行事として、「月例ハイキング」や「合宿行事」、「セミのぬけがら調べ」など独自の自然観察プログラムを主催。一方、後援会時代から発行している月刊会誌「Nature　Study」は、この8月号で通巻615号を数える"ロングセラー"である。

01年9月に発足したNPO法人大阪自然史センター（千地万造理事長）が、友の会の運営を担当している。同センター設立によって、「ミュージアムショップの経営などがNPO法人に移され、より実質的な友の会組織が実現している」と道盛正樹さん。道盛さんは、同センター理事の一人であり、友の会評議員である。

［友の会入りは大学生時代］

西宮市で育った。中高生時代はサッカーに夢中だったが、小学生のころは、「栽培植物が好きで、サンスベリアのように差し芽をすると新しい芽が出てくるのが不思議でたまらなかった」そうだ。大学では社会学を専攻し、部活に生物部を選んだこともあり「都市社会と自然と公害に興味を持ち始めた」という。部活の指導教官の勧めで友の会入りしたのが、3年生のころ。その後就職した役所で、2年目から担当した公共施設や市民への緑化普及事業が、ナチュラリストへの道を決定づけたようだ。

友の会評議員や、NPO法人理事として活動するかたわら、自身の「最も興味のある分野」として「コケ」をあげる。理由は「きれいで、かわいいからです（笑）」。ならばと、大阪で見られる"かわいいコケ"を聞くと、「樹木の立ち並んだ公園や社寺林のクスノキなどについているヒメアカヤスデゴケ。ルーペが要りますが、かわいいですよ」と目を細める。

友の会発足50周年を迎えているがこの間、大阪の自然環境にも著しい変化がある。「最も残念なのが湾岸の埋め立て」と道盛さん。「昔の行事の中には、干潟の観察もありましたが、今は干潟と言えば、淀川の河口域や泉南の男里川（おのさとがわ）河口域などわずかに残されているだけです」。都市部の広がりで田畑が少なくなり、そこに生きる野草や虫も減った。丘陵地の宅地開発も、生き物の多かった里山をなくしている。琵琶湖のブラックバスに象徴される移入種問題も、自然体系を壊しかねない事象だけに、無関心ではおれない。

なるほど厳しい現状だが、まだまだ残された自然は多い。「大阪の自然を見て、自然の世界へはばたこう―というのは私の好きなキャッチフレーズ。そのきっかけとなる場所が博物館であり、より実現させてくれる組織が友の会なのです」と道盛さん。「自然に親しむことで、生き物の命を考えるようになり、また知らず知らずに、命やものを大切にするようにもなるのでは」と話していた。

（文・脇本勤／表紙写真・高島悠介）

※9/4（日）まで自然史博物館にて特別展「なにわのナチュラリスト」開催中!（P16参照：編集部より）